

多社済々

神戸燐寸(まっち)

国内で使うマッチの九割程度が兵庫県内で製造されている。なかでも国内トップの生産量を誇るのが神戸燐寸(まっち)だ。

設立は世界恐慌が起こった一九二九年。戦後も連続自動燐寸製造機をドイツから導入して技術革新の先駆けとなった。新規分野を開拓するため、広告マッチとして米国で人気だった折りたたみ式の紙軸を使った「ブックマッチ」の製造機を入れるなど、業界を主導してきた。

ただ、使い捨てライターや自動点火装置の付いたガソ器具の普及で、マッチの需要は落ち込んでいく。七三年のピーク時に業界全体

《会社概要》

- ▼本社 兵庫県太子町
 - ▼従業員 六十人
 - ▼社長 嵯峨山章
 - ▼売上高 十億円
 - ▼経常利益 二千万円
- (いずれも二〇〇六年四月期見通し)



多角化で守る伝統の「火」

で八十万トあった生産量が現在は二万二千トに、八十社以上あったメーカーは七社にまで減った。

寒冷地でも火がつきやすいマッチ、火薬のにおいを芳香剤で消す消臭マッチなどアイデア商品で、贈答・販促用品の市場を切り開いてきたが、国内販売の行き詰まりを打開するのは難しかった。このため、貿易部を開設して海外に進出。マッチの販路をハンブルク、ロサンゼルス、チューリヒなど世界に拡大。五〇%が輸出品になった。

同時に、広告マッチの販路を使って、ポケットティッシュ、コースターを生産するなど多角化を進めた。二〇〇一年には、マッチのデザインや印刷で培ったコンピュータ編集技術を使って、壁紙などの室内装飾や屋外広告事業に進出。サッカーのワールドカップのスタジアムの広告や、バスの車体を色鮮やかな広告で覆うラッピングバスも手がけた。

マッチ製造から生まれた新規事業は売上高の半分を占める。嵯峨山章社長は「マッチの伝統の灯を決して消さない。そのために新規事業の柱を育てる」と決意を新たにしている。

製造されるマッチの半数は海外へ(兵庫県太子町の本社工場)